

# アラスカの38日間

和田 淳 二

期間：2014年4月21日～6月5日

(氷河上生活：4月25日～6月1日)

メンバー：谷口けい、和田淳二

登攀記録：

- 4/28 Dan Beard 南壁 “Prelude”  
登り7時間、下り5時間
- 5/9 - 10 PK11,300 East Spur “Concerto”  
登り18.5時間、下り11時間
- 5/13 Dan Beard 東壁 “Nocturne”  
登り12時間、下り6.5時間
- 5/17 PK11,300 East Spur “Sonatine”  
登り10時間、下り6時間
- 5/24 - 25 PK11,300 South West Ridge (既成ルート)  
登り14時間、下り15時間

## 1 PK11,300 P3ガリー登攀の顛末

今回の初登攀4本のうち、最後に登攀したのがPK11,300の東面に食い込む顕著なガリーだ。実は、このガリーは二本目に登るべく狙いを定めていたルートであった。というのは、前もってあちこち氷河上をウロウロと偵察して、比較的「お手軽」な印象を持ったからだ。

二本目に登るはずのルートがなぜ最後に回されたのか。それは、ルース氷河のこの時期の気象、或いは今シーズンの傾向を掴むのにそれだけの時間が必要だったからだ。

このP3ガリー登攀の顛末を述べたいと思う。

## (1) 最初の挑戦

4月25日にタルキートナからルース氷河にフライインしてから三日目、4月28日にダン・ベアードの南面に一本、雪壁の登高に終始するラインを登った。滑り出しとしては上々だ。

続いてPK11,300東面のP3ガリーに登りに出かけたのは5月2日。朝6時30分にBCを出発し、順調にアプローチをする。ところが、目指していたガリーがどこなのか、いまいち分からない。それとおぼしきガリーはあるのだが、確信が持てない。偵察で取り溜めた写真とにらめっこしても判然としない。構わず登り始めるという手もあるのだが、上部で行き詰ることはできれば避けたい。「もう少し壁を回り込んでみるか」とか言いながら壁の基部に沿って歩いていたら、いつの間にか東面そのものを回り込んで北面に出てしまった。もはや登攀は出来ない。陽が高く昇り、雪崩が頻発し始めたからだ。その日は登り口を再確認し、BCへ戻る。

## (2) 二回目の挑戦

明けて5月3日、文句なしの快晴。今日こそは、と勇んで5時40分にBCを出発。昨日は行き過ぎた取り付きに、8時到着。さあいよいよ登攀だ。まずは50度程度の雪壁をコンティニュースクライミングで登り始める。小さな雪片や小石がポロポロと落ちてくるのが気になるが、順調に距離を稼ぐ。日差しがたっぷり降り注ぎ、暑い。そして、沢登りで言うところのゴルジュとでも言うべき岩壁の食い込み部分に差し掛かった。けいさんがロープを延ばし、ビ

### 3. 海外登山記録

レイ点を作る。続いて私が登り始める。喉のように狭い食い込みに入っていくところで、(ここで雪崩が来たらヤバいな) ちらりと考えたまさにその瞬間、ドドド…という重低音が微かに聞こえ出す。はっとして顔を上げる。「来るよ！」けいさんが叫ぶ。ガリー上部に、チラチラと飛沫を上げて雪崩が迫ってくるのが見える。(マジか!) 流芯を避けて岩陰に身を寄せ、アックスを雪に深く刺して備える。雪崩本体が来るまでの数秒間、顔は上げずとも重い地響きを感じる。果たして俺は持ちこたえられるのか? 実に嫌な気分。すぐに雪崩本体が濁流となり、ごうごうと音を立てながらすぐ脇を通り過ぎる。ロープを引っ張られて一瞬体勢を崩すが、なんとか無事にやりすごす。

どうやら快晴ということが災いしたようだ。このまま狭苦しいガリーを登り続けるのは自殺行為だと思ひ知る。悔しいが撤退だ。陽が当たり、早くも腐り始めている雪壁を慎重に下る。

下降している最中にも、大きいものから小さいのまで、雪崩が頻繁に我々の脇を通り過ぎていく。日本の残雪期のようなドロドロとした流れなので、退避し易いのが救いだ。ようやくと雪壁を下りきるあたり、どうしても雪崩の通り道を下降しなくてはならないセクションにさしかかった。

最初に私が下り、ピレイ体勢に入る。続いてけいさん、流雪溝の中をクライムダウンしてくる。そのとき、ゴロゴロと音がして視線を上げると、はるか上部の壁で大きな雪煙が発生しているのが見える。「けいサン、雪崩来ます。」声を掛けると、「分かった。でもまだ少し余裕があると思う」落ち着いたクライムダウンしてくる。途中でスノーバーの回収に手こずっている。雪崩は私の位置からは見えないが、雷鳴のような不気味な低音が周囲の岩にこだまして迫ってくる。早く早く! 気が焦る。「まだ大丈夫?」訊か

れた途端、青空いっぱい白い花火のように、雪片がバツと散った。「もうダメ!」言い終わらないうちに雪崩の本体が視界いっぱいに炸裂した。私は必死でけいさんの確保体勢を取る。私の位置は流芯を外していたので最初の一撃だけで済んだが、流雪溝のと真ん中にいるけいさんはタダでは済むまい。雪崩は強弱を繰り返しながら二分近くも流れただろう。(もしかしたらけいサンを掘り出さなきゃならないかもな) チラリと思う。ようやく収まりかけ、けいさんの姿を必死に探す。と、流雪溝の脇に、雪崩の隙間からオレンジ色のザックがチラチラと見えてきた。信じ難いことに、あの瞬間に安全圏まで移動したらしい。恐るべき運動神経。「最後は飛び下りたよ。でもどうしても右足だけは間に合わなくてさあ、『回収』できなかった。打撲で痛いよ。」顔をしかめている。さすが。

この一事が、今日の未練の全てを断ち切った。取り付きまで下り、しばらく放心。今日も登れずに帰路に就く。

#### (3) 待機の日々

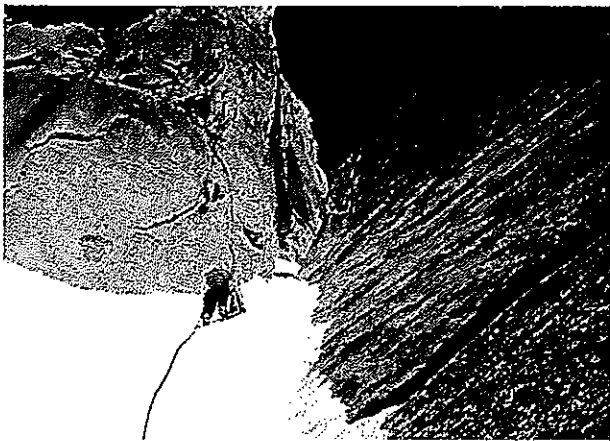
どうも今シーズンのルース氷河は気温が高いようだ。雪面に陽が当たるとすぐさま雪崩が発生するという教訓を得た我々は、夜中の2時起床、3時出発で夜明け前にはガリーを抜け出す作戦を立てた。

5月4日、午前2時。きちんと起床するも、テントを出ると厚く雲が垂れ込めている。なんてことだ。このまま天気は下り坂なのだろうか。もしもガリー登攀中に雪が降り出せば、雪崩のリスクは一気に高まるだろう。出発すべきか取り止めるべきか? 大いに悩む。が、雲の量は次第に増えてきたようだ。「止めとくか。」で中止を決定。再び寝袋にもぐり込む。

5月5日、この日は午前2時に起き出す前から風がテントにバサバサと吹きつけ、襦がバラバラと音

を立てているのが分かる。これはダメだ。一応、空模様を眺めてみたが、迷わず中止。「なんで、こんなかなー」ココアを飲みながら二人でぶつさ言う。

5月6日。やはり午前2時に起床。今日は風がないぞ、と思ったら、微かにパサパサとテント布が音を立てている。雪だ。もうどうしようもない。昨日からの降雪もあり、あのガリーにも雪が積もったことだろう。雪が落ち着くまではとても取り付く気になれない。こうして、P3ガリーはしばらく封印されることとなった。



P3ガリー最狭部への入り口



コルにて。背後のキノコ雪が崩壊した

#### (4) 最後の挑戦

登れても登れなくても、これがP3ガリーの最後の挑戦になることは分かっていた。

そろそろガリーに張っていた氷が融けだす季節になっていたのだ。ここアラスカでは、昼間の時間は急激に延び、季節は目に見えて移り変わっていく。

P3ガリー敗退のあと、我々は二本の新しいラインを手中にしていた。どちらも個性的な、大満足の登攀となり、二人とも大いに気を良くしていた。今回の素晴らしい遠征をきちんと締めくくるためには、なんとしてもP3ガリーの挫折感は払拭せねばならなかった。

そういう思いもあり、気合を入れて5月17日午前0時にBCを出発。もちろん寝不足だが、気持ちで乗り切れるだろう。

1時50分に取り付きに到着し、2時30分登攀開始。真夜中の登攀だが、白夜の折、ヘッドランプは必要ない。前回雪崩に襲われたポイントを4時30分通過、その後も順調にロープを延ばす。ふと見上げると、早くも上部の岩壁に陽が当たり始めている。不安に胸が締め付けられる。速やかに、でも確実に登らなくては。ガリーを無事に抜け出して、稜線上の鞍部に到着したのは8時30分。すでに日差しがさんさんと降り注いでいるが、我々は首尾良く鬼門のガリーを登りきったのだ。

さあ、P3まで登りきろう！と目を転じると、鞍部から先は、巨大なキノコ雪がところどころ生えている、やけにガチャガチャした岩稜だった。一難去ってまた一難。めぐり合わせで、けいさんのピッチ。出だしから苦心惨憺してルートを拓いていく。続いて私のピッチ。巨大キノコ雪をどう越える？さんざん考えたが、やはりこのキノコ雪に触らずしては登れないようだ。キノコ雪の側面にソッとアックスを刺し、クランポンの爪をソッと乗せる。どうやら大丈夫のようだ。右のアックスをクラックに極め、右足をオフィズスにねじ込む。そして左のアックスをキノコ雪に打ち込んだ瞬間だ。ズ、という微かな軋

### 3. 海外登山記録

みのあと、大型バスほどもあるキノコ雪はそっくりそのままスッと落下し始めた。「！」私は声を失い、慌てて壁にしがみつく。雪崩は腹に響く低音を周囲に撒き散らしながら、あっという間に岩壁を下りきり、氷河上に至ってブワッと白煙を爆発させて拡がっていく。僅かな時間差ののち、地響きのような衝撃音が周囲の山々から反響してきた。「マジかよ！」叫びが口をつき、足が震え出した。「ちょっと、大丈夫!?」けいさんから声がかかる。大丈夫と言えば大丈夫だけど……。キノコ雪があった場所にはきれいな青空が覗いている。これぞ怪我の功名と言うべきか。おかげで登攀は容易になり、無事に難所を突破することができたのだ。

二時間半後、我々はP3の頂上にいた。はるか遠く高くデナリの威容が望め、懸案の登攀を成し遂げた達成感がじわじわと湧いてくる。

どちらを向いても絶景だった。あちこちの山並みを背景に二人で登頂写真を撮りまくった。が、上空にはいつの間にか薄雲が拡がり始めている。長居は無用だ。四つ目の登攀の余韻はとりあえず胸に仕舞い、我々は下山の一步を踏み出した。

## 2 BC生活について

### (1) 炊事

BCでは、食事が我々の最大の楽しみであった。

朝、陽が当たらないと寒いので、寝袋にくるまりながらとりあえず読書に励む。が、腹が鳴り始める。仕方がない。テントから這い出して、ダイニング・テント（兼けいさんの居住テント）を訪ねる。まずはお茶の時間。ココア粉をたっぷりと、さらには砂糖も大さじ二杯入れてむせるほど甘くするのが私の好み。

朝食は、だいたいいつも、オートミール。けいさんはチーズやパセリをトッピングして醤油で味を調

えるが、私はココア同様、砂糖をこれでもかとばかり混ぜ込み、ミルクをかけて大甘で食す。あんまり砂糖を消費するので（主に私が）、BC生活終盤にはとうとう使い果たしてしまった。

昼食はスパゲッティやサンドイッチ、茹でジャガイモなどをその日の気分しだいで作る。甘々の紅茶も必需品だ。たまにはフレンチトーストやポテトサラダなどがアクセントを効かせて登場する。いずれも美味であった。

そして夕食。まだまだ日が暮れる気配もない午後6時、腹時計は正確に夕飯の時間を告げる。昼食時にたらふく食べたというのに、一体どこへ消えてしまふのだろうか？

夕食のメニューは多彩だ。肉じゃが、クリームシチュー（の風味）、チラシ寿司、野菜の酢漬け。まだまだ挙げ切れない。

アタック前夜にはスタミナ丼（具は臨機応変に、とにかく大盛りで!）、帰還後には祝福のハムステーキ+ご飯+野菜スープのフルコース。

食材が乏しくなってきた後半戦は、刻みショウガの醤油漬けを編み出し、これは重宝した。ちなみに、米はカリフォルニア米、圧力鍋で炊いていたので失敗知らず、毎日美味であった。

ついでながら、BCを早朝に出発する場合などは、ゆかりを白米に混ぜておにぎりを作って持参することが多かった。簡単かつ美味で食べ飽きしない。最強のアイテム、「ゆかり」。やっぱりオレは日本人だ、としみじみ思った。その見た目から、我々はこれを「花崗岩ムスビ」と称していた。

### (2) 雪と氷とのお付き合い

氷河上生活なので、当然のことながらテントを出ると雪と氷の世界である。私が当初心配していたのは、そのような生活に一ヶ月も耐えられるのか？と

いうことであった。

氷河上にフライインして二日目、きちんとBCを整えるべくスコップを振るって工事にとりかかる。BCの周囲には防風壁を巡らせる。食糧・燃料の貯蔵庫は、雪面を掘り下げてから雪室を造成する。半日ほどかけて居住空間を整えていったが、これが思いのほか楽しかった。氷河上は思ったより掘り易く（今年が特別なのもかもしれないが）、防風壁も貯蔵庫も納得の出来映えとなった。

のちのち、貯蔵庫の補修は私の専門となるが、この「雪遊び」がまた、私の楽しみでもあった。言うなれば、雪だるまを作って遊ぶ少年の心境だろうか。

さらにBC生活に慣れるにつれて、行動も大胆になってくる。用を足しに行くときも素足で雪上を歩き回るようになり、日差したっぷりの屋下がりには全裸になって雪で行水(?)したりもした（もちろん、けいさんの目の届かないところで）。

雪や氷とうまく付き合っていくことが、長いBC生活では必要だと感じた。

### (3) 雑用の日々

BC生活は、決して退屈なものではなかった。確かに時間はたつぷりとあったが、やらねばならないこともまた、たくさんあったのだ。

毎食の炊事と水作り。こんろの掃除。食糧の在庫チェックと整理。天気の良い日には洗濯や洗髪。登攀中に破れた衣服の修繕。アックスやクランポンの研磨。

それらがうまく片付き、読書に耽る至福のひとつ。そして、テントを暖める日差し心地よさに、思わずうたた寝してしまう瞬間。外には順調に干されていく靴下や下着が。

それは、日常生活そのものであった。

38日間といえば、学校の夏休み期間に匹敵する長さだ。その期間を大して長いと感じずに過ごせたのは、BCを「わが家」と思えたからだ。厳しい登攀からへとへとになって帰還し、「わが家」でゆっくりと休養する。そして、自分たちで食事の支度をし、食器を洗う。洗濯をし、髪を洗い、爪を切る。ポロポロになった手袋を補修し、破れた服を繕う。登山靴の綻びはハンドミシンで縫いつける。貯蔵庫を拡張し、BCの防風壁を補強する。



BCのひとコマ



ある日の屋食。ポテトサラダを調理中

生活感漂う雰囲気は私は好きだし、それが平常心を保つ一助となっているのは疑いない。日々の食事の支度も、雪掻きも、私にとっては安らぎの時間であった。普段からさんざんやっていることそのままだったからだ（私の住まいは雪国の山形県であるこ

### 3. 海外登山記録

とを言い添えておく)。クライマーである前に、ただの生活者でなければ、氷河上生活をくつろいで過ごすことはできなかったかもしれない。そう思うと、一人暮らしを重ねてきた長い年月が、誇らしく思えてくる。

タマネギとニンニクの皮を剥くのが私の仕事、それらを切るのがけいさんの仕事。貯蔵庫の修繕が私の仕事、食料品の在庫チェックがけいさんの仕事。水を作るための雪を取ってくるのが私の仕事、こんろの整備がけいさんの仕事。なんとなく分業が確立する。

今回の遠征では、長期間二人だけであったが、ケンカは一度も無かった。信じられないことに。それは、日々の生活において、やるべきことをちゃんと把握できており、何も言わなくても互いに実行していたからなのではないか。言うなれば「生活力」が備わっていたからではないだろうか。

#### 3. おまけの一週間

懸案のP3ガリーを完登し、そのあと我々は既成ルートのPK11,300のSWリッジを登ってきた。この頃から天候がぐずつく割合が増え、既成ルートと言えどもかなり苦戦を強いられての山旅となってしまった。ことに、濃いガスと吹雪のため下山には苦労して登攀よりも時間がかかったし、ルース氷河に出たからはガスのためにBCの方向が分からず右往左往した。だから、BCにようやく到着したときには「これで全てが無事に終わったな」と思った。

翌日、天気は回復し、我々はこのんびりと残り少ないBC生活を満喫していた。衛星携帯電話でふもとの町タルキートナのエアタクシー会社に「明日お迎えよろしく」と連絡し「了解」と返信を受け取った。昼食には、残っている野菜を全て使ってスパゲティ

を作りチーズをたっぷり載せた。明日の今頃にはタルキートナでアイスクリーム三昧だ!

しかし、その日の夕方には雲が空を覆い始め、夜半から雪が降り始めた。ついてない。「下山は明日まで持ち越しだね。」そう話していた。でも、まさかそれから五日間も降り続くとは…。

雪が降り始めてから24時間が経った時点でも、さほど気にしてはいなかった。降り続けている割にはさらっと積もっている程度だったからだ。が、48時間、72時間と連続で雪が降り止まない事態に至っては、さすがに不安が募ってくる。

新雪が積もり過ぎると飛行機の離着陸が困難になるため、積雪がある場合には雪を踏み固めて滑走路を作るのだが、この「滑走路踏み」も三日目、四日目となると、もはや祈るような気持ちで作業をしていた。どうか、明日には晴れてくれますように。

連続降雪が100時間の大台に乗り、いったん止んだ瞬間があった。が、我々の期待をあざ笑うように、今度は猛然と吹雪になってぶり返した。この頃から微かに恐怖を感じるようになる。いったい、この雪は、止むのか?

「ぷつぷつぷつ・・・」みっしりとテント布に積もった雪のうえに、さらに降り募る微かな気配がする。降り始めから六日目の早朝、我々の期待もむなしく雪は止んでいない。午前中に五回目の「滑走路踏み」を終え、昼食はすいとんにする。米もスパゲティもパンも全て底をつき、ホットケーキミックスしか残っていなかったため、すいとんを作ってみたのだ。これは見事に失敗、「すいとん」は溶けてドロドロになってしまう。どうなるんだろうこれから…。

しかし、午後に入って久しぶりに日差しが戻ってきた。周囲にはまだガスが立ち込めているが上空には青空が見える。もう、この機会を逃すてはない。エアタクシー会社に「上空に青空あり、至急回収さ

れたし」とメールを入れ、急いでBCを撤収して滑走路へ向かう。なかなか飛行機は飛んで来ず、やきもきしたが、午後5時30分、無事に回収してもらった。

わずか45分のフライトで街に帰還する。出発時とは異なり新緑にあふれていて驚く。小雨にけぶる新緑は本当にきれいだった。我々は宿に荷物を運び込むと、さっそく待望のアイスクリームを求めて街に繰り出した。



PK11,300 P3頂上にて。後方はディッキー



街に帰還してからも自炊生活を満喫した